

「神戸甲北高校ボランティア委員会 宮城訪問 H27/3/24～27 活動報告ならびに生徒感想」

◆ 第1日目 3/24

「東松島市大曲地区慰霊碑にて献花」 10:30



海岸から2Kmほどの平坦な地形の場所です。
この観音像は6m、この場所ではこの高さまで津波が押し寄せたそうです。

「東松島市鳴瀬未来中学校 高橋裕子校長先生の講話」 11:00～12:30



東松島市、塩竈市の代表の方々が迎えてくださいました。東松島市役所の会議室でおこなわれました。高橋先生より被災当時の生徒や学校のお話を聞かせていただきました。

「東松島市矢本運動公園野球場仮設住宅 訪問」 14:00～16:30



昨年に引き続き訪問しました。
集会所にて住民との交流会と自治会長の小野竹一様と住民の代表の方々からのお話をいただきました。被災当時から現在に至る、様々な深いお話でした。
交流会では茶話会、レクリエーション、手話を交えた歌の披露などを行いました。

この仮設住宅での活動は企画準備運営などすべて生徒が行いました。

「宿舎(七ヶ浜町東宮山鳳寿寺)にて副住職 鈴木俊龍様 講話」 20:00～21:00



昨年に引き続き、宿舎として提供して下さいました。講話もいただき、「時が経つほど当時とのギャップの大きさに戸惑う、3月11日はテレビを見ると辛くなる」現地の方の複雑な心境、まだまだ大きく心に残っている傷跡の一部を感じました。

◆ 第2日目 3/25

「塩竈市内見学」 8:00～9:30

認定 NPO 法人 みやぎ災害救援ボランティアセンターの村上博之様の案内により、鹽竈神社を中心に市内を見学、被災当時～現在までの状況などについて説明を受けました。村上様には非常にお世話になりました。3日目の活動のほとんどをコーディネートして下さり、早朝から同行して案内、解説もして下さいました。



村上様はこの震災以前から宮城にて、日本各地の被災地にボランティアバスを出す活動や学校での防災教育活動など防災・ボランティアに関して精力的に活動されています。

見学の開始時に、震災から「もう4年なのか、それともまだ4年なのか」どう思うか考えながら見学してほしいと問いかけがありました。

「塩竈市、東松島市の小学生との交流会」塩竈市公民館 10:00～17:00

今年度で3回目になる NPO 法人日本福祉美容協会 西山博資様が主催するイベントにて8月に塩竈市・東松島市の小学生を神戸に招いたとき、ボランティア委員会がサポートしました。その時知り合い、文通などで連絡を取り合っていた小学生たちと再会し、子どもたちと一緒に昼食（生徒の案で神戸を代表するものとして「そばめし」）を作り、その後、手話の講習会（本校生が普段の活動で学習している）、茶話会とレクリエーションを行いました。

この子どもたちとの活動は企画準備運営などすべて生徒が行いました。



「宿舎にて学習会」20:00～21:00



NPO 法人レスキューストックヤード 郷古明様を講師に迎えて七ヶ浜での支援活動の状況についての話を聞きました。このNPOは名古屋が本部です。郷古さんは宮城生まれですが、名古屋で大学生のときに活動に参加し、この七ヶ浜町に入り、その後地域住民を支える活動を行い、これからも住民と共に地域を支えていくとおっしゃっていました。年齢も近いので一つの生き方として参考になったと思います。

◆ 第3日目 3/26

「塩釜魚市場にて見学と朝食」7:00～8:30



塩竈の主幹産業である漁業の一部を知ることができました。とても大きなマグロの頭部や解体に使う非常に大きな包丁など初めて見るものばかりでした。市場に並ぶ食材を購入し、朝から豪華な食事でした。生徒は市場の方々との対話も楽しんでいました。ここも村上様が案内してくださいました。

「塩釜高校と交流会、合同学習会」9:00～12:00



塩釜高校を訪問し、両校の交流会と先述の村上博之様を講師として災害ボランティア「高校生にできる災害ボランティア」というテーマで学習会を行いました。

交流会については企画準備運営などすべて生徒が行いました。

「みお七ヶ浜（障がい者就労支援施設）訪問」12：00～13：30



この施設では豆腐の製造とラーメン店を経営し、障がいのある方が生き生きと働いていらっしゃいました。ここで昼食をいただき、被災時の障がい者の状況について体験談を聞きました。

「陸上自衛隊多賀城駐屯地、仙台市荒浜、七ヶ浜町など被災場所の見学」13：00～17：00

当初の予定では七ヶ浜の仮設住宅を訪問し足湯ボランティアを体験して、住人との交流会の予定でしたが現地との調整がうまくいかずキャンセルとなりました。困っていたところ村上様が助けて下さり、被災地の見学に切り替え案内もしていただきました。おかげでさまざまな生々しい被災の状況を知ることができました。



陸上自衛隊多賀城駐屯地を広報部の糟川潤也様に案内していただきました。震災時の駐屯地の状況について説明を受け、現地の自衛隊は自身が被災した状況の中で災害支援活動に当たったことを知りました。

仙台市荒浜では被災し放置されたままの家や建造物の基礎部分が残ったまま、なぎ倒された松林が残ったままと悲惨な状況が生々しく残っていました。道中には解体されず残された住居が数件ありました。この住宅は所有する住人と連絡がつかず解体許可を得ることができないそうです。

祈祷に来られていた地元の方とお話しをでき、現在の状況を知ることもできました。



七ヶ浜町の菖蒲田海岸では新たに建設中の防潮堤の見学、津波が来た場合の避難場所の確認などができました。

避難場所へ導く表示看板がありましたが、いざ津波が来るという時、うまく逃げ切れるのだろうか、想像すると不安になりました。

「津波被害の現状と今後の防災についての心構えについての学習会」 17:00～18:00



宿舎の鳳寿寺にて、村上様ご自身やお知り合いが撮影された津波の記録動画を見せていただき津波の恐ろしさを実感しました。今後、自分たちに起こりうる地震災害時に生き残るため、多くの知識と心構えを身に付けなくてはならないのだと痛切に感じることができました。
研修後の村上様との集合写真です。

◆ 第4日目 3/27 宿舎より仙台空港、帰路へ



移動を安全・快適にするために親切に細やかに対応して下さった現地の株式会社ジャパン交通の高橋邦広運転手様との集合写真です。

今回の活動は、現地へのボランティア活動と共に、震災の悲惨さやこれから私たち自身に起こりうる災害に向けての意識を非常に高めることができた活動であったと思います。

今回の活動を実施するにあたって、神戸甲北高校PTA様より宿泊費の補助を、ひょうごボランティアプラザ様より現地バス費用を助成していただきました。おかげさまで素晴らしい体験をすることができました。ありがとうございました。

今回の活動にはさらに多くの方々のご支援、ご協力がありました。

NPO 法人日本福祉美容協会代表 西山博資様

今回は最もお世話になりました。西山様が実施している活動のおかげで本校ボランティア委員会と宮城がつながりました。今回の宮城での行動には神戸から同行して下さり活動を補助して下さいました。準備段階では塩竈市、東松島市とのパイプ役として動いて下さり、高橋裕子先生、塩釜高校、東松島の仮設住宅、宿泊先の鳳寿寺を紹介して下さいました。

塩釜青年会議所 阿部眞喜様

宮城県塩釜高校 学校長 藤倉眞一様

みお七ヶ浜所長

高野真美様

宮城県子ども会連合会副会長 佐藤様

同校教諭 藤倉宏文様

社会福祉法人かがやき神戸 松本多仁子様

ご支援、ご協力くださった方々には強く感謝いたしております。皆様、ありがとうございました。

今回の宮城訪問にあたって、生徒たちには「目的（何をするために行くのか）」を自分自身にしっかりと問いかけてほしい、互いを受け入れて補い合って行動してほしいと伝えました。そのことを各自が心の中に持ち活動に向かってくれたと思います。そして、企画・準備には多くの時間を費やし、活動の要所においては生徒たちが苦勞しながら考え協力して実行し、このような素晴らしい活動が実現したと思います。この経験が今後大きく役立つと確信し、ボランティア委員会活動の今後の発展を期待しております。

兵庫県立神戸甲北高等学校 ボランティア委員会顧問 深水正和

◇以下は Web ページ用に生徒が書いた短い感想文です

2年

今回の宮城県訪問ではさまざまな年代の多くの人と出会い交流しました。そこで、改めて感じたことは人と関わることの楽しさです。ただ交流するだけではなく、そこで初めて今までで気づかなかったことに気づかされたり、これからの人生の糧となるものを発見することができました。

東日本大震災で起こり、人々がどう行動したかというお話をたくさん聞かせていただきました。津波に全てさらわれてしまった住宅街を見たとき、高い津波が覆いかぶさってくる光景が頭をよぎりとても怖くなりました。

今回の研修で多くの方にお話を聞かせていただきましたが、その方たちに共通する言葉は「伝える」というものでした。東日本大震災について私たちが学んだことをどうやって伝えていくか、これからどう生かしていくか考えていきたいです。

2年

仮設住宅や小学生、塩釜高校との交流に向けての企画案から全てやってみて、計画通りにいかない部分も多々あって大変だった。もう少し、深く考えて計画していれば良かったなど後悔が残っている部分、反省している部分もある。それも全て含め、良い経験ができたと感じている。

ボランティアについて考えることもあれば、講話していただいた方に防災意識を問われたりして、自分はボランティアをこれまでやってきたけど自分自身が防災や減災を実際に見越して考えきれてないことを痛感した。ボランティアは個人で思うことが違う。「伝えることがボランティア」「思いやることがボランティア」だと私の中で考えていた。でもボランティアする人が実際に防災をせずに宮城で見たことや感じたことを伝えても、伝える人に心まで届かないと思った。

まず自分自身が防災について考え実践し、そこからまた新たに見えたことまでも伝えることがボランティアではないのかと感じた。

2年

去年宮城県を訪問して、私達に出来るのは心の復興の手助けだと思い今年も訪問したいと思いました。心の傷は少なからず時間が解決してくれるものもあると考えていました。私達が宿泊した鳳寿寺の鈴木副住職さんの「時が経つほど今と震災当時のギャップで辛くなる。3月11日はテレビを見ると辛くなるので外出している。」という話を聞き衝撃的でした。皆に東日本大震災という悲惨な出来事を伝える為のテレビ放送が今も被災者を苦しめている事を知ったからです。今からさらに復興し、ギャップは広がり、被災者はさらに辛い思いをします。「もう4年」「まだ4年」と言いますが復興は時間で考えるものではない、理屈で考えられるものではないと思いました。だからこそ、被災者の小さな呟きを聞くことが少しでも心の復興の手助けになるのなら、これからも活動を続けていきたいと思います。

2年

私は東北に訪れたのが2年目だったので、去年よりもっと震災のことや人と関わる大切さを深く知れたと思います。

中でも私が1番印象に残っているのは、鳴瀬未来中学校の高橋校長先生による講話です。

涙ながらに震災の当時を語って下さった高橋校長先生は、生徒を一番に大切にす気持ちや震災の当時の様子がすごく伝わり良い勉強になりました。

2年間東北に訪れて、はっきりと分かったことがあります。それは「ボランティアとは何か」ということです。今まで東北の子ども達、高校生、高齢者の方に寄り添って震災の話の聞いたり、様々な交流をしてきました。交流や講話の中で学んだ大切なことを忘れず、私たち高校生が中心となって震災について勉強し知恵や震災の大切さをたくさんの人に伝えることが今、高校生の私たちに出来るボランティアなのではないかと思います。

2年

今回、二回目の宮城県へ訪れて昨年よりも自分の心に少し余裕があると初日の仮設住宅の方々との交流の際から感じていました。それがなぜか、と疑問に感じていたところ、二日目の夜に講話をしてくださった七ヶ浜のボランティアセンターの方のお話を聞いて納得できました。それは、昨年の自分は被災者ということで無意識のうちに相手と距離をとっていたんだということです。ボランティアセンターの方も初めてお話したときに自分が被災者を特別有名な人だと思って接してしまっていたということを聞いて、自分も昨年はテレビのニュースなどを見てそう思っていたからなんだとわかりました。しかし、今年は昨年と違っ

て自分が積極的に交流できたのは、実際に宮城県に訪れてたくさんの方とお話することができて、被災者が特別なのではないと思うことができるようになったからだと思います。そのことに気づけたのは自分の成長と、たくさんの人と出会えた喜びをさらに感じることに繋がったと思います。

2年

私は今回震災以前も含め、初めて宮城を訪れました。宮城はとても良いところでした。そして、宮城でたくさんの方の話を学び、成長できたと感じています。私はこの宮城訪問プロジェクトにあたり被災地の現状を知りこれからのボランティアを考えたいと思い参加しました。実際に被災地の現状を知り、被災された方のお話を伺ったり対話させていただいたことにより、防災や減災、代わりのない命の重要性、大切さを感じました。さらに、ボランティアをするということを改めて学ぶことができました。

実際に目に、耳にしないとわからないことを、訪れたことにより、自分自身で感じることができました。私たちが実際に訪れた事で感じれた事を自分自身の言葉で被災地の方の分も語り継いでいき、災害について考え、次に活かしてことが大切だと思います。

今回私がこのような経験ができたのも保護者や学校の支え、ご協力ご講話して下さった方々のおかげです。感謝の大切さも改めて感じました。

2年

今回の東北訪問も多くの経験をさせていただきました。

お話を聞かせていただく中で、ギネス記録に挑戦したり、人々が触れ合う場所を作ったりと、復興に向けて前へ進もうと考えながら行っているということも学びましたが、現実として復興作業が遅れていることを耳にしました。

- ・家を取り壊すためには許可が必要だが、遺族が見つからず何も出来ない。
- ・復興住宅を出来るだけ高い場所へ作りたいがそのためには山の所有者全員から許可を取らなければいけない。
- ・東京オリンピックが行われる。 など

私は復興作業が遅れている理由にどうして東京オリンピックが関係しているのか分かりませんでした。しかし、建設が東京中心になってしまったこと、その影響で東北の建築が間に合わず、値段が上がるなどの影響が出ていることを聞き、この現実を多くの方に知ってもらわなければいけないと感じました。

これからも感謝の気持ちを忘れず、いろんなことを学んでいきたいです。

2年

今回の訪問で、去年行ったときにできないで後悔していたことができよかったです。

初日の仮設住宅訪問では、おばあさんに震災当時のお話と現状を聴くことができた。また、去年に引き続きレクリエーションを楽しめた。班のおばあさんが、「若い子が来てくれてこんな交流会があると嬉しくて、仮設に入っていないけどなるべく参加してるんだ。」この言葉が聞いて嬉しかった。

2日目の小学生たちとの交流では、夏は参加できなかった甲北生も小学生と楽しい時間を過ごせていい雰囲気だったと思う。

村上さんに被災地を案内していただき、震災のことでなく、いろいろなことを教えていただいた。

去年も聴いたお話やある人に聴いた話を次の日聴くこともあったが、復習になったし、良かった。去年、バスに乗っていて知ったことを後輩に今回教えられなかったことが今回の後悔の一つ。伝えたい、教えたいと思った瞬間に言葉にできるような人にこれからなりたいたいと思った。

1年

東日本大震災から4年経った今、自分に出来ることがあるのか、震災を経験していない自分が被災地に行ってもいいのかという不安。ニュースでは知れない生の声を聞きたい、被災された方々に笑顔になってほしいという期待を抱き宮城県に行きました。3日間の中で実際に海の近くへ行ったり家を建て壊した跡地に行ったりしました。テレビなどでは分からない感覚、被災者の生の声を聞いて言葉では表せられないものを感じました。他にも障がい者就労支援施設の方にお話を聞き困ったこと不便だったことのお話を聞きました。私は普段の部活で障がい者の方とお話をしたり交流したりする機会があるので震災が起きたときのために伝えたいと思いました。そして、私たちに出来ることは多くの人に東日本大震災のことを知ってもらうことだと考えました。だから、私は総合学科発表会や生徒総会での発表の場をたくさん設け、伝えてもらったものを伝え繋げていくのが私に出来ることだとこの研修で思いました。

1年

ボランティア委員会が宮城県訪問を決定したとき私は期待と不安でいっぱいでした。

実際の訪問ではたくさんの方にご講話を頂き、様々な体験をし、自分たちがしていく未来のボランティアの形を見つめなおせたそんな訪問だったと思います。

中でも私は色々な活動の中でも仮設住宅で自分の描いているボランティアの形について深く考えるきっかけとなりました。

仮設住宅に住んでいる一人のおじいさんとお話しをさせていただいて、様々なお話を伺っている中で今生きていてあまり生き甲斐がないとお話をしてくださりました。よろしければと便箋交換を約束させていただきました。明日への希望となれば、と心から願い、その時のやさしい笑顔は私には忘れられません。とても感謝して頂いたこと、喜んでくださったことが本当に心から嬉しかったです。

そして大切な人に渡して、とお届けしたマスコットを私に下さったときは涙が溢れそうになりました。

私はこの時自分は人の心に寄り添うあたたいボランティアをしたい！と心の底からそう感じました。たくさん不安があり、人と人のつながりがあってこそ私は東北で自分の歩むべき道を発見できたと感じました。今生きていることに感謝の気持ちを忘れず、人の心に寄り添っていけるようなボランティア活動をしていきたいです。

1年

今回が私にとって初めての宮城県訪問でした。

行くまでは不安が募っていくばかりでしたが、実際に言ってみると、その不安をはるかに越える体験をすることができ、有意義なものでした。中でも印象に残っているのは、まだ津波の被害の爪あとが残る慰霊碑で偶然出会った地元の方の話です。その方は、震災の被害について、「しょうがない。」とおっしゃっていましたが、その言葉の裏には、私たちには想像ができないような様々な思いがあるのではないかと考えさせられました。だからこそ、その方のおっしゃっていた「生きているだけでも幸せ。」という言葉に、普段感じないような重みを感じました。この他にも多くの体験と出会いがあり、様々なことを考え直すきっかけとなりました。

この訪問で、学んだことを、これからのボランティア活動に留まらず、日常生活にも生かして行きたいと思います。

1年

私は今回宮城県訪問でもっとこうすればよかったと思うことや、嬉しかったこと、心に響いたこと、地震についてなどたくさんのことを学び、感じる事が出来ました。特に仮設住宅訪問ではあまり話すことが出来なくて、間が出来てしまう時がありました。それでも別れるときに「楽しかったなー」と言って握手をして下さり感動しました。そう言って下さる方のためにももっと話せるように頑張ろうと思いました。また、被災地を実際に見させて頂き、元々平らだったはずの地面がでこぼこになっていたり、避難所と書かれた看板が折れていたり、松の木が曲がっていたりして津波の威力を改めて感じました。そうした津波や地震で“生きる”ということに対して一人一人が知識をつけなければならぬと教えて頂きました。避難訓練で自分から率先して避難する、地域の方と助け合いながら生きるため地域の方に顔を覚えてもらうなど今から出来ることをしていきたいと思います。

1年

私は今回初めて東北プロジェクトに参加しました。期待や楽しみな部分もありましたが、不安や心配なことの方が多かったです。

今回講話をしていただいたなかで一番印象に残っているのは鈴木副住職さんの講話です。鈴木副住職さんのお話の中で時が過ぎるにつれて“年々辛くなる”という言葉が衝撃的でした。「当時は状況が悪くてもそれがふつうになってなれる。そしてだんだん良くなっていき慣れる。その時急に当時の映像などを見ると鮮明に思い出して辛くなる。このギャップがしんどく辛い」とおっしゃっていました。正直私は年々辛さは減っていると思っていました。なのでその言葉を聞いたときすぐにはわからなかったのですが、想像し考えてみると少しわかる気がしました。このような考えは実際に聞かないとわからなかったことなので今回知ることができてよかったです。

ものすごい速さで過ぎていった4日間講話や現地の様子を見ることによって初めて知ったことや気付いたこと、改めて考えさせられたことがたくさんありました。しんどいこともありましたが、私は今回宮城に行けてよかったです。学んだことを皆に伝えていきたいです。

1年

被災地には未だ津波の傷跡が残っていた。そこは空気が冷たく重たく感じた。この4日間はたくさんのお話を学ばせてもらった。4日間を通し特に印象に残っているのは、自衛隊の方のお話を聞いたことだ。自衛隊の方に直接お話を聞かせていただいたのは初めてだった。聞くことすべての言葉の一つ一つに重みがあった。自衛隊の方々は自らが被災者であったにも関わらず、懸命に救助活動をされていたそう。当時の映像を見せていただいたが、怖いや驚きを通り越し、何も言葉が出なかった。何気ない毎日が本当に大切に、無事に生きていることが奇跡なんだと、心から思う。しかし恵まれた環境にいる私が、あたりまえの勉強も出来ていないことが、とても情けなく感じた。今回の研修では震災のことだけでなく、自分自身の欠点にも気づくことが出来て良かった。これからは4日間で学んだことを生かし、ボランティア委員会の一員として、もっと頑張っていきたい。

1年

私はこの4日間、「自分の今できることを探す」という想いを胸に東北に行きました。企画段階ではこんな理由で行っていいのか、この企画で皆が楽しんでくれるのか、とたくさん悩みました。また、私は知らない人と話す事が苦手で、子どもたちとの交流や仮設住宅訪問では、うまく話す事ができるかととても不安でした。でも勇気を出して話しかけてみると、どの人も明るく、笑顔で応えてくださったのでとても嬉しかったです。また講話では貴重な話をたくさん聞くことができました。講話を聞いて、改めて震災の怖さを知り、自分は震災について全く知らなかったのだと感じました。一番心に残ったのは「話を聞くだけでもボランティア」という言葉です。私は今までボランティアに行ってものを残すことがボランティアだと思っていたのでとても驚きました。今回学んだことを次、起こるかもしれない震災に少しでも役立てることができるよう、周りの人に伝えていきたいです。

1年

実際に被害に遭った場所でお話を聞いて、PCやテレビで見ただけでは感じる事のできなかった思いや疑問に感じたことが沢山ありました。だから、多くのことを知る事ができたと思います。また、多くの方々に震災当時にどんなことがあったのか、それからどう感じたのかを教えてくださいました。私はそのお話を聞いて、私がお話してくださった方と同じ場にいたらどんな行動を取っていたのかを考えました。きっと私は、ただただ怯えているだけなのかと思うと、もっと震災のこと、防災のこと知っていけないと感じました。それだけでなく、震災や防災のことを知っていたつもりで今回東北に行ったことが恥ずかしく思いました。これからは、少しずつでも震災や防災について学んでいきたいと考えました。

1年

私は3月後半にて東北へ行き、ボランティア活動をさせていただきました。

被災地へ行ったときに感じたことは、4年前にその場でどんなことがあったのか
今もなお、仮設に住んでいる高齢者の方々
今年の夏、行われた未来の架け橋プロジェクトにて出会った子供達
将来のために全力で学校生活を送っている塩釜高校の生徒たち
など等を含む東北の方々とその関係者たち

この文章の閲覧者の方々は上記の方々の当時のことにどう思っているか分かりますか？
普通は分かる訳がありません
私もそうです 加えては大規模の震災に遭ったことはありません

ですが、私達はこんな思いをする人たちがいることを把握しておかなければいけないと私は思います。そして、把握しつつこれから人生に優しさが役立つよう、大切に生きてほしいと私は思います。